

2019年2月17日(日) 13:30~

会場：世田谷区船橋まちづくりセンター・活動フロアー  
バージの会企画講演

## 豊かに生きる一手仕事を通してー

昭和女子大学名誉教授、フリー刺繍画家 天野 寛子

昨年、バージの会から「豊かに生きる一手仕事を通してー」のテーマで講演をするように、というお話をいただきました。

「人生100年時代(平均寿命女性87.26歳。男性81.09歳 2017)、今、自分たちは50~60歳というところを生活している。色々勉強しながら、地域活動をしながら、考えながら生きてきた。まあまあ楽しかった。が、ふと「今」の延長上に、充実した自分の高齢の日々があるだろうか? イマイチ確信が持てない。今のうちに何かやっておくことがあるのではないのか?」と考えることがある。その辺りを考えていくための手がかりが欲しい。

「今」、色々危ない状況があるけれども、とりあえず日本は平和が維持されていて、経済基盤が崩れていなくて、今程度の健康が維持されていくとして、何を考えておけば良いのだろうか。

「手っとり早い方法として、年の差20~30年ある天野の生活を見てみよう。何か、これからを考えるヒントがあるのではないか?」ということのようでした。

自己紹介を兼ねて、今回のテーマと、私が仕事をしていた時に取り組んできたことを繋いでみようと思います。

10年前まで昭和女子大学の教師でした。1963年昭和女子大学卒業しました。研究分野は「生活経営学」という分野です。研究テーマは一つは「戦後日本の女性農業者の地位」もう一つは「日本人の生活様式→日本人勤労者の生活時間分析」でした。

時代は高度経済成長期、豊かさを求めて「働け!」「稼げ!」があらゆることの前提になっていました。「稼ぐことによって物を買うことができ=豊かな生活ができるのだ」と、日本中が信じていました。反面、1970年代は、「公害」一般の人にも認識されるようになりました。産業による空気や水の汚染、産業排水による河川や・海の汚染、騒音、振動・・・等々による、生活破壊・健康破壊が顕在化しました。

「豊かさって何?」お金? 才能? 便利? 多忙・時間? 消費? 高価な一流品? 外国旅行?

そんな中で、授業で「豊かさとは何か?」「日本人の生活はどうなるの?本当の豊かさって?」「あなたはどうか生きるの?」と、学生に問いかけ、考えさせねばならなかったのです。

### 1. 「生活の豊かさ」と「豊かに生きる」とは同じだろうか?

現在の日本人の生活水準は、経済的な指標で国内総生産(GDP)国際比較で見ればアメリカ、中国に続いて日本は3位です。しかし、世界経済フォーラム(WEF)による男女平等の指標「世界gender gap 報告書2018」で見ますと149カ国中日本は110位。G7の中では圧倒的最下位。(因みにフランス12位、ドイツ14位、イギリス15位、カナダ16位、アメリカ51位、イタリア70位です)。

私は、1ヶ月に一度、美容院に行きます。その時、『家庭画報』とか『ミセス』を見るのを楽しみにしています。そ

こには、私の生活とはかけ離れた、「お金を消費する」生活、デラックスな旅行をして、超デラックス宿に泊まることや、超一流の料理人の料理を食べることや、デラックス美容をして、宝飾品身に纏うこと、贅を尽くしたおしゃれをすることが、魅惑的な写真で展開されています。それをみるには見るのですが、私が「生活の豊かさ」を考える時、「こういう生活がしたいのではない」のです。「贅沢をする」「お金のある生活」をすることと「豊かに生きる」ことは同じとは考えてはいないのです。

1970年～80年代（私の30～40代ですが）、他の研究者仲間と同じように、やたら、多忙になっていく現実がありました。共働きで、家事・育児・研究・講演・学生指導・本を書きたい・趣味？と、もがいていました。給料は世間並みに上がって行きましたが「忙しさ＝時間貧乏」の中で、擦り切れそうになっている自分の生活を自覚せざるを得ませんでした。家事の合理化が当たり前になり、家事からの解放は、救いではありましたが、しかし自分ができるのに「手作り風？」のものを買って「便利？」とか「豊か？」とか、言えるのだろうか？ 何か変ではないか？ この多忙さ、切迫感を「女だけが抱えているのではないのか？ 夫との分担（男女平等）の生活を築かないと、どんなにやっても私にとっての豊かさはないのではないのか？ ジェンダー認識もあって、疑問だらけでした。こうした認識は私個人だけではなく、研究仲間と共有することができて、「日本の勤労者共働き家族の生活時間研究をすることになっていきました。

1975年（子どもは2歳）の頃、同僚の手芸の先生に誘われてある刺繍の展示会に行き、桜井一恵先生のフリー刺繍と出会いました。それまでも洋服を着やすいように直したり、クロスステッチや色々な手芸を楽しんでいましたが、何か物足りないものを感じていたのですが、桜井先生の作品を見たときに「探していたものがそこにある！」と感じました。すぐにも弟子入りしたかったのですが、時間的に無理な状態でした。（ようやく桜井一恵に師事できたのは1986年でした）時間的には無理な状態ではあったのですが、私の中には「マルチな感覚を失いたくない（多面的な自分を守りたい）」ということがありました。忙しさに巻き込まれているだけになると、その職場だけの価値観の中だけで生きることになり、それは危険なことだと感じていました。仕事とは関わりのない本を読むこと（＝読書会）、仕事や家事とは関わりのないこと（芸術や手仕事＝手芸）をすることを「生活時間の中に持っていること」は、「自分」を守る上で大事なことだと思っていました。

1984年（私44歳）、国際家政学会がノルウェーであり友人と参加しました。プログラムの中に「ホームヴィジット」がありました。中学校か高校かの家庭科の先生のお宅で、大きな家ではありませんでした。ごく普通の家。さりげなく手作りのものが置いてあり、絵やタペストリーが壁にかかっている、そんなに広くもない部屋で私たちをお茶でもてなしてくれました。感動しました。質素、しかし、暖かさと落ち着きを感じました。「生活文化」を感じました。冬、外は寒く、室内を暖かくして手芸・木工その他の手仕事を楽しむ生活の豊かさを、そういう時間の流れのある生活を、自分の能力を活かして地道に楽しんでいる生活を感じました。手作りの品のある落ち着きのある生活……。決して「手作り風のものを買ってきてそこに置いている」偽の生活とは全く違う生活……。

そして思いました。「普通の生活」が、こんなにも私を考えさせるということは何なんだろう？ この人たちは1日24時間をこの人たちは、どう使っているのだろうか？

研究者仲間との生活の時間の研究は、男女平等を軸に、次のような生活行動を時間量分析を行いました。この分析により何がわかったかということ、自分の生活の偏り、今のままの生活を続けるとどんな人間になってしまうか、何ができない人間になっていくかがわかっていくということです。それは、何が考えられなくなっていくかを表しているとも思いました。生活習慣が時間として現れていました。「私が本当にしたい生活はこういうことなのか？」を考えざるを得ませんでした。

この表は、「生活時間の行動分類」です。右側は、私たちが毎日目覚めてから寝るまでの行動です。それを生活上の目的でグルーピングして名前をつけたのが分類①～④です。私たちは今居る社会で生きていかねばなりませんから、1日24時間を「人並み」に合わせつつ、また競争に勝つために、個性を発揮するために「人並みを外し」ながら、行動を割り振って生きています。どこかにあまりにも偏ってしまうと問題が起きて来ます。睡眠もとらずに働きすぎると病気になりますし、働かなければ食べて行くことはできません。毎日の生活行動の延長上に将来の生活が展望されるとすれば、毎日の生活行動のバランスについて考えてみる、ことは大事なことだと言えます。

生活時間分類	生活行動
①生理的生活時間（健康に関わる時間）	睡眠、食事、身の回り・風呂、医療、休息、運動
②収入労働時間	勤務、家での仕事、仕事関連の勉強・研究、内職的労働、通勤）
③家事的な生活時間（義務的時間でもあり生活の質を高める時間でもある）	調理、食事片付け、住管理、衣生活管理、家事としての裁縫・編み物、買い物、育児・教育、世話介護、家政管理、その他
④社会的・文化的な生活時間（個人の能力とかかわり人生を豊かに充実する時間）	付き合い、交際、社会的活動、ボランティア活動、教養・研修、読書、新聞、テレビ・ラジオ、団欒・家族、趣味、運動・散歩、娯楽、その他

## 2.手仕事は生活を豊かにする？ そうでもあり、そうでないかもしれない

かつて、女性は、家事（という手仕事）から逃れられませんでした。延々と家事（家事的な生活時間）に追いまわられていました。そして、社会は、家事を含む手仕事から解放する「名目」で機械化・社会化して来ました。その延長上に今、AI（人工知能）があります。掃除機・洗濯機・炊飯器・冷蔵庫・万能調理器・全自動・・・、既製品（衣類・寝具・座布団・カーテン等）、加工食品それらは機械化された工場で作られたもので、全部を手仕事でこなさねばならなかった女性を「家事（手仕事）から解放したのです。私の母の時代、女性は「夜鍋仕事」に繕い物をしたことを、今の若い人たちはもう知りません。「家事は女がやるもの」でありジェンダー問題であったのです。機械化されることはないだろうと思われていた介護にも、AI（人工知能）を組み込んだロボットが導入されています。育児・介護の社会化は進んでいます。

それでは、生活から「家事仕事が無くなったか？」といえ、昔とは違ってきてはいても、今なお、いくら機械化・社会化しても、家事・育児・介護は家庭の中に残っています。しかしそのうち、若い女性も家事ができなくなってきました。友人の息子さんの話ですが、学生たちでバーベキューをしようということになった。女の子もいるのに実際に動いていたのは男子学生ばかりだった。そんな中で男子学生から「女もやれよ」という言葉が出たのだと。

今、超高齢社会です。夫婦で助け合えるだけの生活技術、家事的な能力を身につけていないと高齢期の生活の質が保てません。「人間にとっての生活技術的自立（家事仕事ができる能力）」は必須能力なのです。

また、家事とは別に、「今、手仕事ブーム？」とも言えるのかもしれませんが。「手仕事」に限定されず、音楽・美術への関心も高くなっています。食の分野で言えば、TVでも、男性の調理、料理番組への男性の参加、菓子作り、パン作り、など、面白おかしくやっていますし、衣・服飾の分野では「手芸ブーム?」「リメイクブーム」と言えるのかもしれませんが。「世界に一つ」「差別化」のための手芸とか・・・。陶芸ブームとか。ところで、手仕事って何なのでしょう？ 衣・食・住の生活に必要なものを「手を使って作っていく、機能させていく」ことなのですね。「無ければ、作る」、大きいものは建物から小さいものはスプーンのようなものまで。衣・食・住・日用雑貨、冠婚葬祭の道具などそれぞれに手仕事で作られたのです。かつては生活必需品を作っていました、今は、生活必需品は購入し、作

ること自体の面白さを追求する人も多くなっているのではないかと思います。

手仕事の範囲はとても広いのです。下の表は、用途ではなく材料で見ました。

- ・木工・竹工：家具・木彫・指物・大工・木工挽物（ろくろを使うような）
- ・ 金属加工：船・橋・ブロンズ像・エンジン部品加工・アルミサッシ・装飾品（指輪・ペンダント・・・）――  
金属の種類、それぞれの道具の制作
- ・陶芸：土器・陶器・磁器、お地蔵さん、置物・・・
- ・ガラス：器・置物・装飾品
- ・プラスチック工芸
- ・紙：漉き、紙細工、折り紙、・・・
- ・染・織
- ・布・糸と針を使う手芸（和裁・洋裁、パッチワークキルト、服飾手芸、民族ごとの刺繍、日本刺繍・フランス刺繍・スウェーデン刺繍等々、いろいろな刺繍があるなかのフリー刺繍）

などなど。

こんなに広い中の一部分に「布・糸・針」を使って縫う「手芸」があり、「フリー刺繍」は、いろいろな刺繍の種類があるなかの1つの流派にすぎません。

### 3.手仕事の魅力

手仕事の魅力は、何を選んでいるかによって違うと思います。ガラスをやっている人と、木彫をやる人とは、「創造する喜び」という言い方では同じかもしれませんが、技術的側面での面白さ・魅力は違ったものがあるのではないのでしょうか。私の場合は、「刺繍」の中でも、フリー刺繍、それも、衣類に刺繍することに魅力を感じるのではなく、額装して掛けて楽しむ「絵」（フリー刺繍画）に魅力を感じているのです。私には、「壁に絵を掛けるようなライフスタイルへの憧れ」が子どもの頃からありました。

#### ① 手仕事（フリー刺しゅう）に救われてきた

子どもの頃から比較的一人遊びが多かったのだと思います。一人で何で遊ぶか、何を読むか、何を書く（描く）か、何を作るか、いつも時間が空いたら何をすることが決まっていました。「私の時間」がはっきりしていました。今思うと、「私の時間」以外の時間は、全部が「義務的に付き合う時間だったのかもしれない」と思えてきます。

共働き子育て期は本当に多忙でした。いつも「ながら」仕事をしていたように思います。私はほんの少しの時間でも手を動かしていたかったです。人と話したり、会議の時もメモをとったり、落書きをしたり、ただペンで四角や丸を塗りつぶしたり、手を動かしながらものを考えるタイプなのです。

子育て期、本を読んだり、ものを書いたり（子どもが小さい頃はパソコンはまだありませんでした）、何をしても邪魔しに来る時期があります。ある時、「いわさきちひろの画集」から可愛い子どもの絵を輪郭はアウトラインステッチで描き、その周りの空間をクロスステッチで埋めることを思いつきました。空間を色を変えながらクロスステッチで埋めていくことは、画面が大きければもちろん時間がかかる作業ですが、いつでも始めることができ、いつでも中断できる作業です。ちひろさんの絵は可愛いから、子どもにもわかります。アウトラインステッチで描いた「子ども」を「これがHだからね」というと、子どもはすごく満足そうで、邪魔しないのです。それで「これがHだからね」と言いながらクロスステッチをする（手を動かしている）ことで私は救われていました。

#### ② 布と糸でする手仕事はいつでも、どこでもできる

針仕事は、針先が見える範囲、自分の右手と左手が届く範囲の仕事です。もちろん、洋服や和服の布に刺繍するためには一定の広さと道具が必要ですが、私が創るような小さな絵は、小さなスペース、短い時間、小さな道具で場所を問わず楽しめるのです。私は、家でしか刺せない大きさのもの、新幹線の中でもクリニックの待合室でも刺せる小

さなものなど、同時並行で刺しかけのものをいつも準備しています。材料は、さまざま、思い出のある洋服の布を使ってとか、どなたかにいただいた布や糸とか、もちろん新しい布を買うときもあります。いつでもどこでもできるためには、「手芸用眼鏡を新調すること」が大事です。それと家では「自分用の照明スタンドを買うこと」。自分用のスタンドをパッと点けると、そこは「私の手芸のための空間」です。

### ③ 心を伝えられる

あまり強調したくはないのですが、手仕事は、それを作っているあいだ中その対象についての思いを持続していることは確かなので、「心を伝えられる」という側面があります。現在の80歳前後の世代までは、母の思い出は、「衣服は母親が作ってくれた、セーターは母が編んでくれた」記憶と結びついています。また、悲しい記憶として戦争に行く兵隊さんに鉄砲の弾が当たらないように<ひと針ひと針>の気持ちを込めて晒しの布に赤い糸で縫って戦地に行く兵隊に贈った<千人針>を、聞いて、あるいは読んで知っているかもしれません。ひと針に「弾に当たりませんように！」と念じるしか自分の意見を表せなかった、「戦争は反対です」と声をあげられなかった女性の地位の低さ悲しさの記憶を忘れることなく現在を楽しみたいと思っています。「心がこもっている」からと洋服や小物を着たり持ったりすることを押し付けられたとしたら、「うっとうしく」感じるのではないのでしょうか。

### ④ ものとして目に見える形になる

手仕事の魅力もっとも大きなことは、「思い」を、<色に、形に>することができることだと思います。どこまで進んだかが、目に見えることは周囲の人にも認めてもらえ、自分でも納得できます。一概に言えませんが、「手仕事をする人は口下手な人が多い」と言われたりします。実際、手作業に没頭するときは無口になりますし、自分が言葉で表現するのは難しいことを色や形で表現していることを経験します。そして形にしたときに、ホッとするのです。

### ⑤ 手仕事は世界に通じる

布と糸にかかわらず、手仕事やアートは言葉を超えて人に理解され、共感されます。あるご縁をいただいて、2013年8月ウラジオストックで開催された第8回ウラジオストックー日本ヴィジュアルアートビエンナーレに作品「東日本大震災シリーズ」を展示しました。



展示の仕方も良かったのだと思いますが、本当に真剣な表情で丁寧に見ていただけました。見に来てくださった肩にノートに感想を書いていただいたのです。約2週間の期間で、79人の感想がありました。その中に感想とともに手作りのわら人形のプレゼントを置いて行ってくれた方がいました。

尊敬する天野寛子様 2013年8月25日 (田代紀子訳)

展示会に来たのは今日で2回目です。あなたの創造の力と私たちに近い国、同じ極東圏に住む日本人の生活と文化に触れるきっかけを与えてくれたことに感謝します。どうか信じてください。ここに住む多くの人々があなたの国で起こったことを心配しています。本来日本民族が持つ団結力が災難に打ち勝つ力となっていると心から信じています。まさにあなたの作品がそのことを証明しています。私からは小さなプレゼントを贈らせていただきます。日本に降りかかった負の出来事を日本の皆さんと一緒に心配している人々がロシアにいる、ということをお出ししていただくためです。私の作ったこの人形を見て、ロシアとその国に住む人々のことを思

い出せるように、同じ極東人としてのロシアの人たちを思い出してください。被災されている方もそれを支援する方々も、どうかご自愛ください。どうかお元気で！そして、もう一度、ありがとうございました。敬具

タチアナ・カルムイ

テレビの時代なのだと改めて感じました。私が東京で見たテレビ画像をこの地の人たちも同時にテレビで見て、私を感じたように感じてくれたのだと本当に思いました。そして、私の作品からその時の気持ちを思い出し、共有してくれたのだと思いました。もう一つ感じたことは、「感想を言葉で表現する」ことに、この方々は慣れているということでした。書いてくれた人数も多くて驚いたのですが、字数の多さも驚きました。

ニューヨークでも展示するチャンスもいただきました。中西繁画伯の個展に「招待展示」として呼んでいただきました。中西氏は、元建築家。1995年阪神淡路大震災以来、「廃墟と再生」をテーマに建物を描いてこられた画家で2015年2015年12月、ニューヨークで、大きな個展をされたのです。その「廃墟と再生」の中に、東日本大震災による破壊、南三陸や福島第1原発があり、私の作品「東日本大震災シリーズ」とテーマが繋がっているのです。

## ⑥ フリー刺繍の持つ魅力

「フリー刺繍ってなんですか？」とよく聞かれます。「布と糸で描く絵です。布の小片をアップリケした上から糸で絵を描いていくのです。桜井一恵先生が1975年ごろから始めた刺繍で、技法のベースは私たちが小さい時に学校で習ったフランス刺繍や「手縫い＝運針」なのですが、規制の図案を使うことはなく、展開の仕方が自由で、その人がクレヨンで絵を描くように、「布と糸と針を使って、自由に絵を描く、新しい表現法の一つ」なのです。

先ほども話しましたが、私の母の時代は、生活は手仕事で成り立っていましたので、和裁・洋裁、服が綻びた時の修繕、やボタンつけ、家族のセーターの編み物、寝具である布団づくり、着物を解いて他のものに作り変えるリメイクなどは、「家事仕事」でした。現在の私たちの生活の中では、そうした仕事とパッチワークキルト、服飾手芸、民族ごとの刺繍、日本刺繍・フランス刺繍・スエーデン刺繍等々は、「やりたい人がする趣味」になっています。そして、生活の中に「アート」が定着する中でいろいろなくアート表現をすることができるようになってきているのだと思います。フリー刺繍画の場合、出発点が「針仕事の刺繍」だけれど、仕上げたものは「(額に入れた、壁にかける)絵」なので、「伝統的刺しゅう」としても「絵画」としても認知されていないようなところがあります。絵画の表現法の多様化が進む中で、絵の具で描いた一部に布を貼って質感を出したり、逆に、布の貼り絵に絵の具を重ねたり、等々さまざまな方法が用いられています。「入り口はく手芸」ですが、出口はく絵」。それで良いと思っています。

自由度が大きくて自分のライフスタイルにあっているから私は好きなのです。

- ・ 生活のなかでの、この「小布・糸」を使って何かを作ってみたいという思いが実現しやすい
- ・ 糸で字を書いていくような新しい試みができる
- ・ 伝統に縛られていないから、比較されることがない。既成の上手/下手の評価の外に居られる
- ・ 針・布・糸ー感情が鎮まる (私には、早く出来ないことが大事なかもしれない)

そんな中で楽しんでいるような気がします。

## ⑦ クリエイティブな時間のある生活

私にとっては、1日24時間のなかに、フリー刺繍に関わる時間（絵を見たり、草花を描くつもりで見たり、実際に落書きしたり、・・・）をもつことはとても大切なことです。生活のなかで、モノ（木々・花々の表情、人々の姿、街、建物）の見方や感じ方が、豊かになると感じています。新聞をよく読むこと、報道写真をよく見ること、そして、自分の感じているものを新しくし、それを表現できるようになることはやはり嬉しいし、できた作品は自分の分身なのです。作る過程、布を置いて見ては外して色を変え、縫ってみては解く、その試行錯誤を苦心しながら楽しんでい

るのです。そして自分の中のイメージがそこに「展開できた時」、嬉しいのです。自己満足の世界です。

#### ⑧社会性を広げること

作る時も十分楽しんでいるのですが、もし誰かに見てもらえて、共感が得られたとしたら、また違った嬉しさがあります。共感というのは自己満足の世界から一歩でて、一種の社会性をもつことです。他人の目に晒されることで、批判されることもあり、人の評価に耐える精神的勁さが必要にもなります。また、発表の場を開拓・確保していくことも必要になります。しかしまた一方、私は、ある団体に所属して、定期的に一定の規定に合わせた作品を製作し「出品しなければならない」状態になりたくはないのです。

作品の販売を考える場合、今、若い人たちはインターネットを活用して、そういう「場を探し」をととても上手にしています。インターネットで発信し、作品を販売する市場を世界にも広げています。ただ、自分の作品を「商品」としてのみ位置付けてしまうと、「他人の要求する作品づくり」になって「稼ぐための仕事」になってしまいます。自分の中の「創作要求」とはズれてくることもあるかもしれません。

## 4. 「社会性」を生活の中でどう取込む？

生活を時間分類から見ると「社会的・文化的生活時間」は、地域や友人との付き合い、交際、社会的活動、ボランティア活動をしたり、・・・口座に参加して学んだり新しい技術を研修してレベルアップしたり、読書したり、新聞を読むんだり、テレビ・ラジオを見聞きしたり、家族との団欒（時にはケンカも）、趣味を楽しんだり、運動・散歩をしたり、娯楽を楽しんだり、といった行動時間です。別の言葉で言えば「個人の能力と関わり人生を豊かに充実する時間」です。その中で「社会的」とは何なのでしょう？ 行動で言えば、付き合い、交際、社会的活動、ボランティア活動、その他、自分や家族以外の人や地域等に関わっていくことと言えます。

私たちは「社会的能力」を身につけているのでしょうか？ 学生が卒業して仕事をできるようになる時、「社会に出る」と言いますから、「何十年と仕事をしてきたのだから、社会的能力は身につけている」と思っているかもしれません。が、長年務めた会社を定年退職した男性が、家に張り付いてしまって、妻が地域活動などしようと思っても「させてくれない」と妻が嘆くような状況 妻の社会的活動能力さえも妨害してしまうわけですから、とても社会的能力があるとは言えません。男女平等な社会・生活の実現のために、民主的な社会の実現のために、平和な社会の実現のために、心豊かな地域社会を創造するために身近なところから行動する能力は、「長年、仕事をしていたから大丈夫」というほど簡単なものではないかもしれません。

- ・社会的な発言力（男女共同参画、役職の引き受け、また、役職にこだわらず個人として発言していく能力）
- ・自分の感想・意見を表現する能力
- ・意見の違いを調整していく能力
- ・自発的活動力（ボランティア活動、個人として社会的な責任を積極的に引き受けていく能力、リーダーを引き受けていく能力）
- ・問題発見対応能力（役職にこだわらず、地域社会の中の新しい問題を発見し対応して行く能力）
- ・妻をふくむく活動する人>の足を引っ張らない能力

脳科学者の茂木健一郎さんは「脳科学的に言うと、脳は他人のために何かをすることと、自分のためにすることをほぼ同じようにうれしいと感じます。自分が幸せになるためには、他人のために何ができるか考えてみることも大事なのです。他人を喜ばせようと自分が学ぶことは、他人のためになることであり、世の中に貢献することで感謝され、

回り回って自分が幸せになるのです。利他性は結局自分の幸せを呼び込むことになるのです。」(2018年10月22日 日経 NP) と言っています。

作品づくりに関して、「手仕事を見てもらえるチャンスを作る」、自分のメッセージを受け取ってもらい、共感してもらい、そこから生まれる新しい人間関係を楽しめるように「一歩踏み出す(勇気)」ことはとても大事なのですが、そこで生じる新しい人間関係に悩まされるようになることもあるかもしれません。過度にトラブルに巻き込まれないようにそのバランスをとることが「生活に必要な社会性」なのだと思います。

## 5. 東日本大震災をフリー刺繍で

「東日本大震災を何故、刺繍で作品にしてみようと思ったのか？」という質問をこれまでもよく受けてきました。3.11、M9.0の大地震の時私は東京の自宅にいました。すぐにテレビをつけて、初めはよくわかりませんでした。時間が経つにつれて信じられない光景、山のように新聞の切り抜きがたまっていきました。人々の悲しみ、哀しみ、怒り、恐怖、混乱、それらの集積……。それに原発事故が重なり、自分がこれまで関心を持ってこなかった問題との関わり、私自身がひどく混乱しました。

何かしなければならぬのに「何もできない自分」の気持ちを落ち着かせたかった。果てしない被害状況、溜まる報道写真。ボランティアに駆けつけるだけの体力はなく、募金をするにしても極少ない額でしかなく、「これでは何にもならない」と思わざるを得ませんでした。震災から3週間後、報道写真の切り抜きを刺繍で刺し始めました。刺している時間中、悲しみ、鎮魂、不条理な怒り、祈りをせめて共有できたら・・・という気持ちでした。「手を動かしているだけでよかった」ということがありました。私は被災者ではありませんし、限界状態ということはありませんが、「手を動かして、気持ちを落ち着ける」ということでは、佐藤忠良の次のような文章を思い起こします。

「捕虜生活のはじめの頃、比較的早く心身ともに弱り出し死んで行ったのは私どもの収容所では若い人が多かったように思う。(略) 私たちのように日用には何の役にも立たないものを描いたり、作ったりしているものでも、手に仕事をもったものの強さをしみじみと感じさせられた。大工さんでも左官屋さんでも職につかせられると、同じ配給のものを食べながら、しゃんとしてしまうのである。

こういう極限環境の中で面白いと思ったのは、話すこともなくなると、みんなが何かを削り出したことであつた。自分で使うスプーンや配給たばこのパイプを作るのだからできあがったスプーンは心なしかその人に似た形になるのが多かった。裸電球の下でペチカを囲み黙々と削る後ろ姿を見ていると、「俺は生きているんだ！」と背中が叫んでいるようにさえ見えた。

小さいのやら大きいのやら、一人で幾つも幾つも作るのだった。ただ削っていたかったのだ。(p.104『つぶれた帽子』(中公文庫) <シベリアー削る>より)

のちに高田松原プロジェクトを立ち上げるのですが、このきっかけになったのも、被災者の肩の「90歳を過ぎた義母が、針仕事がしたいと言って・・・」という言葉でした。下に示した「クマ?ちゃん」仙台でお会いした被災者のNさんから頂いたものですが、「これを何十体もただただ編み続けることで立ち直れました」とおっしゃっていました。





話をもとに戻しますが、「報道写真を刺繍で刺す」と言っても、どんな写真でも刺繍で刺せるかというところではなく、絵として組み立てやすい写真もあれば、組み立てにくい写真もあります。それで、より丁寧に新聞を見るようになったのですが、そのうち、写真では被災者の心が写しきれていない、と思うようになり、新聞に掲載される短歌を注目するようになりました。短歌や俳句は、選び抜かれた言葉になっているので、それを目にした方の心を打つのだと思います。

## 6. ししゅう高田松原プロジェクト

2011年9月、友人の伊藤セツ先生夫妻に誘われNPOシャンテイの移動図書館にボランティア参加し、巡回した先が陸前高田でした。移動図書館でお会いしたある被災者の言葉です「90歳を超えた義母が時間を持て余して。私がずっと相手をしているわけにもいなくて。手仕事が出来ないというから編み物を教えようとしたんですが、編み物はしたくないみたいで……。仮設住まいではボロ裂がなくて……」。すぐに、東京から小布を送りました。その時『フリーししゅう画集繋ぐ①』を同封しました。しばらくしてお手紙をいただきました。「『陸前高田はこんなに綺麗な町だったんだよ』と孫に教えられるように、いつか、刺繍してみたい」と。しかし、どうしていいかわかりませんでした。2012年に被災した女性農業者グループとそのグループの支援をした元生活改良普及員のFさんの聞き取り調査で陸前高田を訪れた帰り、モビリアの仮設住宅で被災者を支援していた中西朝子さんにお会いしました。「『陸前高田はこんなに綺麗な町だったんだよ』と孫に教えられるように、いつか、刺繍してみたい」というお手紙をいただいたのだけれど、「どうしたものか」とぶつけ、相談しました。

メールでのやりとりが始まりみんなのたからものだった「高田松原をししゅうで作ろう」ということなら、仮設住宅の生活で孤立しがちな被災者が、「お茶っこ」をしながら手芸する機会をつくるということになるのではないかと、とりあえず呼びかけてみよう、というあたりが出発点でした。

2013年9月『画集②』を出版するときに「ししゅうで高田松原を作りませんか」という呼びかけを入れ、岩手県内の仮設住宅を中心にワークショップをしました。決して大々的な「展示」が目的ではなかったのです。

「ししゅう高田松原プロジェクトの成果は何だったのか？」と振り返るのですが、被災者の方々からも支援者の方々からも「一緒にやってよかった」と言ってもらえたことだと思います。

①被災者の方々から松原の楽しかった光景を思い出してもらえた。

②「できない」と思っていた人に「私にもできる」と思ってもらえた（長野のデイホームの高齢者、他）。

- ③ 口コミ、友人・知人との関係の再構築のきっかけを作った（教え子、高校時代のクラスメイト、自分が作れないが友人に宣伝し共有してもらえたり・・・）。
- ④ 作品が741枚集まった（作品を作って喜んでくれた、作るプロセスも楽しんでもらった、大震災を可視化した）。
- ⑤ 作品と作品、被災者と被災者、被災者と支援者、支援者と支援者をつなぐことができた。
- ⑥ 展示し、見に来て、参加を確認してもらい、「参加させてくれてありがとう」と喜んでもらった。
- ⑦ 展示の主体（実行委員）としての活動を引き出した（神戸、大阪、横浜、盛岡、京都、長岡、世田谷など）
- ⑧ 次に何かあった時、自分も参加しようと思ってくださる人も出てきた。

## 7. おわりに

東日本大震災の時まだ子どもだった世代に、「東日本大震災」どう引き継がれていくのでしょうか？

「手仕事を通して、人生を豊かに生きる」ということは、「手仕事が、24時間の何処かにある。手仕事で作ったものを生活の中に生かすという<ライフスタイル>を私はもち続ける」ということです。

年齢が上がるとともに、目も悪くなり手の感覚も落ち、疲れやすくなってきます。今やっていることも、いつまでできるかは、わかりません。が、私は、「だんだんできなくなっていく自分を嘆く」タイプの人間ではなく、今できることを楽しむタイプの人間です。

生活時間のバランス「健康維持のための時間、自律」「毎日の生活を心地よいものにするための自立的な行動」「生活を楽しく生きがいにつながるように文化的な生活時間と社会的な生活時間」を持つとく<心する>こと、そのためのほんの少しの勇気を発揮することによって「楽しさの質を変えていこう」と思います。

有り難うございました。